

中国と日本の古代絵画の太湖石

Taihu Stone in the old Chinese and Japanese paintings

飛田 範夫
HIDA Norio

キーワード: 太湖石、庭園、歴史、絵画、中国、日本
Keywords : Taihu stone, garden, history, painting, China, Japan

As Taihu stones (deformed limestones) were considered one of the symbols of China, so those were painted in Japanese paintings. Classifying by the way of placing the Taihu stones in old Japanese paintings, we can find the way to use the Taihu stones in Chinese garden as following.

1) “Shinū-tu (仕女図)” painted in the Tang-dynasty, 8th Century, shows they placed small stones in a garden, but we can see that the Taihu stones took place of the small stones from Japanese painting “Torige-ritsujo-no-byobu (鳥毛立女屏風)”. I assume that they use bigger Taihu stones in their garden to enjoy watching from “Qixian-tu (七賢図)” painted in Chinese Tang-dynasty, 9th Century.

2) In the “Bada-chunyun-tu (八達春遊図)” painted in 10th Century, they place one huge Taihu stone in their garden. From the Japanese painting “E-inga-kyo (絵因果経)” in 8th Century, I guess they put a Taihu stone, which is as tall as a human, in the main place of the garden.

3) In “Longchi-jingdu-tu (龍池競渡図)” painted in the Yuan-dynasty, 14th Century, we can see big Taihu stones both left and right side of the palace. But it was imaged from the old palace of old paintings. From the Japanese paintings “Kegon-shuso-eden (華嚴宗祖師絵伝)” and “Toseiden-emaki (東征伝絵巻)” painted in the 13th Century, we can see they placed a Taihu stone in front of the palace in Song Dynasty (960-1279). I assume that they placed Taihu stones in their garden first and then they started to place the Taihu stones in front of their palace.

4) From “Qianlongdi-ji-fei-guzhuang-xiang (乾隆帝及妃古裝像)” painted in Qing Dynasty, 18th Century, we can see that they put Taihu stones in a pond of their garden. “Sancai-tangwu (三彩堂屋)”, a miniature made in 8th Century, shows that they built a pond at the front of the building and placed big stones at the front of the mountain. In “Genjo-sanzo-e (玄奘三蔵絵)” painted in 13th Century in Japan, there is a big Taihu stone beside the pond built next to Xuanzang's father's house. It means it started from Song - Dynasty to place the Taihu stones beside a pond.



写真 1・2 上海・豫園の太湖石(1978 年撮影)

1. はじめに

太湖石とは、中国の江蘇省と浙江(せつこう)省の境界にある太湖や、その周辺で採れる石灰岩のことを指している。長い間の水の浸食によって、多くの穴があいた複雑な形をしていることが特徴になっている。日本の庭園で太湖石を見かけることはないが、中国の古い庭園には数多く使われている。造営年代が明代にまでさかのぼる上海の豫園(よえん)では、かなり大きな太湖石が単独で置かれていたり、園池の岸に設けられた假山(築山)では、数多くの太湖石が使用されたりしている [写真 1・2]。

中国の庭園の太湖石については、文献から調べた詳しい研究がいくつかある¹⁾。しかし、実際の太湖石の使い方は、詩や歴史書からだけではわからないことが多い。

美術史の分野では、日本の室町時代の雪舟(1420～1506)の水墨画に太湖石が描かれていることが、すでに明らかにされている²⁾。だが、それよりも古い奈良・平安・鎌倉時代の絵画にも、太湖石らしいものが見られることはあまり知られていない。題材が中国の事柄であるために、中国から伝来した絵画を手本にしているように見受けられる。文献だけではわかりにくい中国の庭園での太湖石の利用について、中国の絵画を参考にしながら、日本の絵画から実態を探ってみたい。

2. 中国での太湖石の愛好

(1) 中国の庭園の形態

中国では太湖石の愛好が始まる以前から、大規模な園池を造営することが始まっていた。中国庭園史研究者の外村中(あたる)は「古代東アジアの「池と島の園林」と「池と築山の園林」³⁾で、古代の中国の庭園について以下のように述べている。

秦の始皇帝(前 246～210 在位)は『元和郡県図志(巻 1)』によると、帝都咸陽(かんよう)の近くに渭水(いすい)から水を引いて蘭池を掘り、池中には蓬萊山を造り、石製の鯨の像を置いている。また、前漢の皇帝だった武帝(前 141～前 87 在位)は『史記(巻 12)』によると、太初元年(前 104)に帝都長安の西方に建章宮を造営して太液池を掘り、蓬萊・方丈・瀛州(えいしゅう)・壺梁(こりょう)などの島を設けている。

秦・前漢時代の宮廷の庭園は、このように池を掘り神仙島を設けることが主流だったが、その後は園池とは別に築山を置くように変化していった。三国時代の魏(ぎ)の明帝(226～239 在位)は帝都洛陽内の宮城に、景初元年(237)に華林園を造営している。天淵池という園池を造り、陸地部分に景陽山という大規模な築山を設けたのが特徴だった。『三国志(巻 25)』には、太行山の石英を切り穀城山の文石を採って、景陽山を造ったと書

かれている。

南朝の宋の文帝(424～453 在位)は、帝都建康(南京)の宮城内に魏と同名の華林園を造営して、やはり同名の天淵池と景陽山を築いている。北魏の孝文帝(471～499 在位)は、魏の華林園の天淵池を改修して九華台の上に清涼殿を建て、次の宣武帝(499～515 在位)は景陽山の南に新たな景陽山を築造した。『魏書(巻93)』によれば、宣武帝の時には茹皓(じょこう)という者が活躍して、天淵池の西に山を造り、洛陽の北邙山(ほくほうざん)と南山から掘り出した美しい石を据えている。

隋の煬帝(ようだい、604～618 在位)になると、再び神仙島を池中に設けるようになる。『大業雜記』によれば、大業元年(605)に煬帝は帝都洛陽の外に西苑を造営し、園池の中に蓬萊・方丈・瀛州などの島を築き、それらの島の上に道真観・集霊台・総仙宮などの建物を設けている。神仙島を築かせたのは、煬帝が道教に関心があったためらしい。

このように隋までの中国の皇帝の庭園を見ていくと、園池の中に神仙島を築くことから始まって、次第に陸地に大規模な築山を造るようになっていくことがわかる。それでは臣下の者たちは、どのような庭園を作っていたのだろうか。文献からはわかりにくいのだが、発掘結果からその様子を知ることができる。

陝西省西安市で唐代の中・下級官吏の墳墓(8世紀)から、民家の住宅建物と庭園を粘土でかたどって焼いて彩色した、「三彩堂屋(どうおく)」「陝西(せんせい)歴史博物館蔵」と呼ばれる家屋模型が発見されている⁴⁾。建物は中庭を囲んで棟が続く四合院と呼ばれる構成で、奥の建物の前に築山を持った園池が作られていて、築山の前面には大きな立石が置かれている。

三国時代の魏の華林園では、太行山や穀城山の石を採ってきて景陽山を造り、北魏の華林園では天淵池の西に山を築き、洛陽の北邙山と南山から掘り出した美しい石を据えている。園池の中の神仙島は土を盛っただけでよかったが、陸地部分に築山を設けるようになって、飾るために石が必要になったのだろう。石を使って築山を造ることが始まったことが、唐代の中・下級官吏の庭園にまで影響を及ぼしたと考えられる。

(2)太湖石の庭園への利用

太湖石の庭園への利用はいつ頃から始まったのだろうか。『唐詩紀事(巻40)』によれば、4世紀後半に晋の顧辟疆(こへききょう)が蘇州で造営した庭園が、中唐の頃まで残っていたらしい。この辟疆園について陸羽が「怪石粉(飾り)として相に向う」と詩に詠んでいるので、地縁から太湖石を庭園に置いていたのではないかと推測されている⁵⁾。

しかし、太湖石が流行するようになるのは唐代になってからで、詩人白居易(772～846)が太湖石の愛好家だったことはよく知られている。『旧唐書(巻166 本伝)』に白居易が蘇州刺史(しし)を罷めた時に、「太湖石五、白蓮〔略〕を得て以って帰る」とあり⁶⁾、『白氏文集(巻第52)』の「太湖石」と題した詩の一節に、「纔(わづ)かに高さ八九尺(せき)、勢い千万尋の若(ごと)し」とある⁷⁾。太湖石を5個しか持って帰らなかったのは不思議なのだが、自然の山岳の光景を凝縮したような太湖石の形を白居易は好んだのだろう。

北宋の徽宗(きそう、1100～1125 在位)は、程俱の『採石賦(ふ)』によれば、首都の汴京(べんけい、開封)に景靈西宮を造営するために、太湖の包山から太湖石4,600個を採ったという。さらに政和7年(1117)から宣和4年(1122)にかけては、汴京で上清宝籙宮(ほうろくきゅう)の東に、周囲が5.5kmで高さが138mほどの艮嶽(こんがく、正式名は万寿山)を造成している。造営のために蘇州に蘇杭応奉局を設けて、朱勳(しゅへん)という人物を責任者として、民間の珍しい花・石・動物などを略奪して運んでいる。収集運搬に携わった「花石綱」と呼ばれた者たちは、

横暴だったために恐れられたという。収集された石の中に太湖石が含まれていて、太湖石が大流行する契機になったらしい⁸⁾。

皇帝の太湖石趣味は貴族や官吏にも浸透していたようで、北宋中期の詩人梅堯臣(ばいぎょうしん、1002～1060)は「劉仲叟(りゅうちゅうそう)澤州園中の醜石を詠む」と題した詩で、「醜を以って世は悪と為すも 茲(こ)れは醜を以って徳と為す」と詠んでいる⁹⁾。太湖石は醜い姿をしていると認めながらも、独特の良さがあると賛美している。

しかし、蘇州などの庭園を飾っている太湖石は、おそらく多くの日本人には奇妙なものとしか見えなだろう。中国文学研究者の井波律子でさえも、太湖石を「醜い美しさ」と形容し、纏足(てんそく)を美しいと見るのと同様の変形嗜好としている¹⁰⁾。北宋時代は太湖石の醜さを美しいとする美意識が、中国文化の中に確立した時代だったようだ。

清代には乾隆帝が無数の太湖石を江南から運ばせて、北京の御花園・寧壽宮・瀛台(えいだい)の大規模な改修を行なっている。『清内務府奏銷檔(そうしょうとう)』の乾隆17年の条には、「永安寺山後の扇面房の東西両辺、太湖石の山洞を成堆す」と書かれている¹¹⁾。

3. 中国の絵画の太湖石

(1)太湖石を描いた絵画

中国での太湖石の愛好を反映して、中国の各時代の絵画には太湖石が描かれているものがある。北京と台湾台北の故宮博物院には、清朝の皇帝が収集した美術品の多くが収蔵されているが、太湖石が描かれた絵画のいく点かは、日本放送出版協会編・発行の『故宮博物院(第1～5・15巻)』(1997～1999年)に収録されている。主にこの画集の中から、太湖石がどのように描かれているかを見てみたい。所蔵先については北京故宮博物院を北京、台北故宮博物院を台北と略して記した。このほか、注1の外村の論文「明末清初以前の中國庭園における太湖石について」にも、太湖石を描いた絵画が挙げられているので参考とした。

中国の絵画に描かれている穴がたくさんあいた石を、厳密に太湖石と判定することは難しい。たとえば同じような形をした石に、「靈璧石(れいへきせき)」というものがある。これもやはり石灰岩だが、微粒の方解石を多量に含んでいて、色は黒や黄褐色のものが多い点が異なっている。刃物で削ることができないほど堅く、たたくと澄み切った音を出すことから、楽器を作るのに使われてきたらしい。靈璧石は採掘が容易でなく産出が少ないために、まれに穴のあいたものがあるということから、太湖石を染めて偽物を作ることがあったという¹²⁾。

貴重な靈璧石をわざわざ太湖石に見せることはなかったわけだから、絵画に見られる飾りとして置かれた穴のあいた大小の庭石は、靈璧石の可能性は少ない。だが、日本でも岐阜県大垣市金生山(きんしょうざん)で太湖石と類似した石灰岩が採掘されているから¹³⁾、中国でも他の場所で同様の石が産出されていた可能性はある。しかし、来客に自慢して見せている石は、太湖産でなくてはならないだろうから、絵画の穴が数多くあいている石は太湖石と判断していいだろう。

(2)唐代(618～907年)の絵画

中国の絵画に描かれている太湖石を、年代順に見てみよう。9世紀後半に唐の孫位が描いた「七賢図」(上海博物館蔵)では、人の背丈ほどの太湖石の前で、七賢人と呼ばれた人々が座って鑑賞しながら談笑している¹⁴⁾。背後にバショウのような植物などが植わっていることからすると、庭園の一部なのだろう。理想とする賢人たちの姿を描いた想像図ということになるが、作成時期は太湖石の流行していた時代なので、これは唐代の庭園の太湖石の実景と見るができる。庭園の平坦な場所に数個



図1 趙鼎「八達春遊図」(10世紀、台北・故宮博物院提供)

だけ太湖石を置いて、その形のよさを鑑賞することが流行していたらしい。

(3) 五代(907～960年)の絵画

五代の趙鼎(ちょうてい)の「八達春遊図」(台北蔵)には、異様な形の巨大な太湖石が1石だけ据えられた庭で、8人の男たちが鞭を振って馬に乗っている姿が描かれている[図1]¹⁵⁾。馬を走らしているのだから、庭園というよりも宮殿の広場だろうか。三国魏(220～265)の諸葛誕・夏侯玄ら8人を指すという説や、西晋の宣帝(司馬懿(しばい)、179～251)の8人の兄弟を描いているという説などがあるが、いずれにしても想像的な描写ということになる。

衛賢の「高士図」(北京蔵)は、漢代の隠士の梁鴻(りょうこう)とその妻の孟光が、清貧な田園生活を送ったという故事を描いたものだという[図2]¹⁶⁾。建物の周囲には、巨大な太湖石が数個置かれている。清貧な生活と太湖石は不釣り合いだが、自然の岩盤に囲まれているような風情を描きたかったのではないだろうか。

(4) 宋代(960～1279)の絵画

1) 北宋(960～1127)

真宗朝(997～1022)に花鳥画家として活躍した趙昌(ちょうしょう)の「歳朝図」(台北蔵)は、新年を祝う吉祥画で中央に太湖石が置かれ、その周囲にウメ・ツバキ・スイセン・バラ・タケなどが描かれている¹⁷⁾。太湖石が縁起がよい石と考えられていたことが、この図によってわかる。

北宋の皇帝徽宗が太湖石を描いた「祥龍石図巻」(北京蔵)が、北京故宮博物院に所蔵されている¹⁸⁾。祥龍石は「環碧池の南、芳洲橋の西」にあると、図の左側に説明されている。竜の形をしていることから「祥龍石」と命名されたい。徽宗は汴京



図2 衛賢「高士図」(10世紀、北京・故宮博物院提供)

の上清宝籙宮で艮嶽を造成して石を数多く据えているが、庭園の一部に特異な形の太湖石を1石だけ置いて、鑑賞の対象にもしていたようだ。

2) 南宋(1127～1279)

作者不詳の「折檻図(せつかんず)」(台北蔵)は、13世紀初頭頃に制作したとされている。『漢書』の「朱雲伝」によって、前漢の皇帝成宗の老師張弼(ちょう)を奸臣だとして朱雲が名指している場面を描いたもので、教訓的な意味を持つらしい¹⁹⁾。成宗の後ろに石製の台に置かれた太湖石があり、取り押さえられている朱雲の背後にも、地面からそびえ立つ大きな太湖石が描かれている。貴重な太湖石は台の上に飾って鑑賞し、巨大な太湖石を五代の「高士図」のように外側に据えることで、山際にいるような雰囲気を出したのだろう。

(5) 元代(1271～1368)の絵画

王振鵬(しんぼう)が至治3年(1323)に制作した「龍池競渡図」(台北蔵)は、北宋時代(960～1127)に開封の金明池で3月に行われていた祭典を題材にしたもので、やはり想像的な絵画ということになる²⁰⁾。宮殿の園池で龍船に人々が乗って競い合っている有様が描かれていて、太鼓橋を渡った先の中央の建物の左右に大きな太湖石が置かれている。建物が実際のように見えるから、太湖石を描いたことも根拠があるのかもしれない。

(6) 明代(1368～1644)の絵画

仇英(きゅうえい、1494?～1552?)の「漢宮春曉(しゅんぎょう)図」(台北蔵)は、漢代の王昭君の秘話を題材にして宮中の女性たちの生活を描いている[図3]²¹⁾。宮殿の前庭に四角形の縁石で囲まれた中に、低木を添えた高さ5mほどの太湖石が見られる。別の建物横にも同じような縁石に囲まれた太湖石が置かれているが、これは添景的に描かれているためか、実際には



図3 仇英「漢宮春晚図」(16世紀、台北・故宮博物院提供)

ありえない青い影のような形になっている。仇英はパトロン之家に寄寓してその収集品を見て絵画を制作したとされていて、元代の「龍池競渡図」の太湖石の光景とも類似しているので、古い絵画を模倣して描いている可能性がある。

明文嘉などによる「合作薬草山房図」(1540年、上海博物館蔵)では²²⁾、山荘風の母屋の近くに屋根の高さほどの巨大な太湖石があり、手前にもかなり大きそうな太湖石が置かれている。この絵では太湖石の数が少ないが、同時代の文征明(1470～1559)の「真賞齋図」(1557年、恭王府蔵)では、太湖石を庭園に乱立させて岩山のように見せている²³⁾。太湖石を単独に置くことから始まって、数多く並べて山にすることもされたのだろう。しかし、巨石をそろえることは困難なので、土を盛ってその上に太湖石を置いたり、積み重ねたりすることが一般的になったのではないだろうか。

明代には喫茶が文人の間で流行していたことから、丁雲鵬(ていうんぼう、1547～1621?)は万暦20年(1612)に「玉川煮茶図(ぎょくせんしゃちやず)」(北京蔵)を制作している²⁴⁾。唐代の隱者盧仝(ろどう、号は玉川子)を描いたものだが、背後には巨大な太湖石が置かれ、その横にバショウが植えられている。前に石をテーブルとして茶道具を置いているのは、文人茶の祖とされる盧仝らしきを出すためらしい。

(7) 清代(1616～1912)の絵画

王鑑(1598～1677)が順治13年(1656)に制作した「夢境図」(北京蔵)の中央には、湖に面した山麓の邸宅が描かれていて、その周囲にいくつもの太湖石が置かれている²⁵⁾。午睡の夢で見た風景というから、仙境に住む人物の姿を思い描いたものだろうが、明代の「合作薬草山房図」の太湖石を小さくしていくつも置いた状態になっている。

清朝の乾隆帝の時期(1736～1795)に制作された金廷標の「曹家授書図」(台北蔵)は、後漢の時代に才女の誉れが高かったという班昭が、子供に書いたものを与えている姿を想像的に描いたものだが、建物の出入り口と窓の外に太湖石が見える²⁶⁾。風俗は清代の典型的な上流階級の家庭内の光景を描いたものらしいので、庭の太湖石も清代の実際の情景と見ていいのだろう。

金廷標とイタリア人宣教師で画家の郎世寧(ろうせいねい、ジョゼッペ・カステリオーネ、1688～1766)が合作した「乾隆帝及妃古装像」(北京蔵)は、清朝第6代の乾隆帝の妃の肖像画で、妃が漢民族の伝統を取り入れた衣装を着用している姿を描いている[図4]²⁷⁾。場所は宮廷のハス池の水閣で、窓の外には池中に置かれた太湖石が2石見える。これは園池の中に太湖石を置いていた事例になる。

作者不詳の「弘曆薰風琴韻図(きんいんず)」(北京蔵)は、乾隆帝が古希を祝って制作させたもので、図中に「古希天子」の



図4 金廷標・郎世寧「乾隆帝及妃古装像」(18世紀、北京・故宮博物院提供)



図5 作者不詳「弘曆薰風琴韻図」(18世紀、北京・故宮博物院提供)

印が押されている²⁸⁾。中央の台上で琴を弾いているのが乾隆帝で、背後の屏風の後ろに巨大な太湖石が置かれている。また、皇帝の横と前にも太湖石があり、前の石は鉢の中に据えられている[図

5]。この絵は太湖石を愛好する人間の究極の姿のように思える。これらの石は乾隆帝が江南から運ばせたものの一部なのだろうか。明代の「玉川煮茶図」にも茶人の背後に大きな太湖石が置かれているから、明代にはすでに流行していた太湖石の使い方だったのだろう。

(8) 中国絵画の太湖石の変化

太湖石が描かれている中国の絵画を歴史的にたどってみると、庭園に太湖石を数石立てて鑑賞したり、建物の周囲に太湖石を1、2石飾りとして置いたり、数多くの太湖石を築山に据えて険しい山岳をかたどったりしていたことがわかる。中国の庭園での太湖石の使い方の変遷をまとめると、以下のようになる。

- 1) 唐代の「七賢図」では、庭園に太湖石をいくつか置いて、その場に座って談笑しながら鑑賞している。白居易が蘇州から太湖石を5個持ち帰ったということは、このように太湖石を置いていたということなのだろう。
- 2) 唐代の「七賢図」から発展したものだろうか、五代の「八達春遊図」では邸内に巨大な太湖石を1石だけ置いて飾っている。北宋の皇帝徽宗の「祥龍石図巻」からも、特異な形の太湖石を庭園の一部に1石だけ置いて、鑑賞の対象にしていたことがわかる。南宋の「折檻図」では、形がよい太湖石を台の上に飾って鑑賞しているから、大きくて形がよい太湖石を珍重することが伝統になっていたらしい。
- 3) 次第に、建物の周囲に太湖石の名石を飾りとして置くようになったらしく、元代の「龍池競渡図」では宮殿の建物の左右に大きな太湖石を置き、明代の「漢宮春曉図」でも宮殿の前や横に、縁石に囲まれた太湖石が描かれている。
- 4) 五代の「高士図」では、居住する建物の近くに巨大な太湖石を複数置くことが始まっている。巨大な太湖石を庭に据えて岩盤のように見せることで、山荘のような雰囲気をもたせようとしたらしい。明代の「合作藥草山房図」でも同様の傾向が見られるが、同時代の「真賞齋図」では庭園に太湖石を乱立させて岩山のようにしている。しかし、巨石をそろえることは困難なので、土を盛った上に太湖石を置いたり積み重ねたりすることが、一般的になったのだろう。
- 5) 庭園内の個人的なくつろぎの場に、太湖石の名石をいくつか置くこともされ続けている。これも唐代の「七賢図」の伝統を継承したものだろうか。明代の「玉川煮茶図」では、巨大な太湖石を背後に置いて茶を楽しむ人物が描かれ、清代の「弘曆薰風琴韻図」では、太湖石に囲まれて過ごしている乾隆帝が描かれている。
- 6) 園池にも太湖石を使うことも、中国では早くから始まっていたと思うのだが、古いものは見当たらない。清代の「乾隆帝及妃古裝像」になって、園池の中に太湖石を置いている光景が描かれている。

4. 日本の絵画の太湖石

中国の唐代の絵画は残存しているものが少ないためか、太湖石を描いたものはほとんどない。しかし、日本の奈良時代や鎌倉時代の絵画の中にも、太湖石らしいものがいくつか描かれている。これらの石が太湖石だとすれば、古代の中国の庭園を知る上で参考になる。

(1) 『鳥毛立女屏風』

『鳥毛立女屏風(とりげりつじょのびょうぶ)』(宮内庁正倉院事務所所管)については、天平勝宝8年(756)の献物帳である『国家珍宝帳』に、表装について詳しく書かれているが、現在は天保年間(1830～1844)の修理の仮表装のままになっている。

第1・2・3扇では、樹種不明の樹木と太湖石の間に、髪を高く結ったふくよかな顔の女性が立ち[図6]、第4・5・6扇では



図6・7 『鳥毛立女屏風』(8世紀中頃。左、第3扇。右、第4扇)

同じ種類の樹木の下に太湖石を置いて、その上に同様の顔つきの女性が座っている[図7]。正倉院所蔵の「鹿草木夾纈(きょうけち)屏風」や「象木騰纈(ろうけち)屏風」でも、樹木が中央に置かれていて、その下に動物が描かれている。樹木を中央においてその下に人間や動物を配置する構成は、ササン朝ペルシャやインドの意匠が起源になっているという。

『鳥毛立女屏風』が国産かどうかが問題になるが、使用されている鳥毛を鑑定した結果、日本産のヤマドリ(山鳥)の羽毛とされている。第1扇の下貼り紙に、「天平勝宝四年六月二十六日云々」と墨書のある反故(ほご)紙が使われていることから、国産説が強くになっている²⁹⁾。

この『鳥毛立女屏風』の太湖石を樹木の前に添えた光景は、1987年に中国長安県で発見された、唐代(8世紀後半)の中・下級官吏の墓の壁画「仕女図」(陝西歴史博物館蔵)に類似している³⁰⁾。「仕女図」は樹木の下に遊ぶ人物を6つの連続する枠に描いているが、六朝(りくちょう)時代の墓室に既にこうした屏風式人物画が見られるらしい。樹木の下にたたずんだり座ったりしている女性が描かれているが、石ではなく木の台に腰を下ろしている女性もいることが、『鳥毛立女屏風』と異なっている。

太湖石が流行するようになってから、「仕女図」の樹木の前に置かれた小石が太湖石にかわったのではないだろうか。太湖石を描いた唐代の屏風が、日本に持ち込まれて模倣され、『鳥毛立女屏風』ができたという推測が成り立つ。穴があいている上にいびつな形をした太湖石を椅子にしているのは、太湖石をよく知らない日本の絵師の想像ではないだろうか。

(2) 『絵因果経』

『絵因果経(えいんがきょう)』は『過去現在因果経絵』とも呼ばれている。釈迦の前世から始めて、降誕してから出家して悟りを開いて布教するにいたる伝記を説いたものだが、下段に経文を書き上段に絵を加えて分かりやすくしている。奈良時代(710～784)に制作された古い写本としては、上品蓮台寺本(京都・上品蓮台寺蔵)・醍醐報恩院本・旧益田家本(熱海美術館蔵)・東京芸術大学本・出光美術館本がある。各写本はそれぞれの巻を「上・



図8 上品蓮台寺本『絵因果経』(8世紀中頃)



図9 『華嚴宗祖師絵伝(巻2)』(13世紀前半)

下」に分けて合計で8巻にしていたようだが、いずれも数巻が残っているだけなので、話の続き具合をみるのは難しい³¹⁾。

『絵因果経』の基になっている『過去現在因果経』は、インドで3世紀に成立し、5世紀中頃に中国で翻訳されたと推測されている。日本の『絵因果経』の古写本に登場する女子の髪型からすると、中国の原本の制作年代は、貞観(627～649)から天冊萬歳元年(695)までとされている。また、建築の描写からすると、すべて中国系建築の表現でインド系の要素はないが、中国の絵のそのままの模写ではなく、日本人の考え方で変えていると推定されている。書風からすると、上品蓮台寺本・醍醐報恩院本は天平勝宝5年(753)頃、旧益田家本は絵は新しいが字体は醍醐報恩院本と同系、東京芸術大学本は天平神護(765～767)頃と見られている³²⁾。『絵因果経』の原本は中国で7世紀頃に制作され、日本で8世紀の半ばに写本がつくられたということになる。

『絵因果経』の古写本の太湖石を見てみよう。上品蓮台寺本の第3巻には、インドの宮廷の皇太子として生まれ育った釈迦が、宮廷の園林で遊ぶ姿が描かれているが、四阿(あずまや)風の建物の横に人の背丈ほどの太湖石が置かれている[図8]。上品蓮台寺本から分断されたい旧久邇宮家本(奈良国立博物館蔵)の皇太子が妃と一緒にいる絵にも、人間の腰の高さくらいの太湖石が基壇の横の方に置かれている。上品蓮台寺本には山や川岸の岩が描かれているが、それらは穴のあいた石になっていないから、意識的に太湖石を描いていることがわかる。

修行の旅に出た釈迦を描いた旧益田家本(第7巻)の長者耶舎(やしゃ)の家の横には、太湖石が据えられ背後に樹木が植えられている。また、耶舎が会いに行った釈迦の横にも、大きな太湖石が置かれていて、場面によっては花木が太湖石の後ろに添えられている。しかし、東京芸術大学本(第8巻)では、釈迦が法を説く傍らに太湖石が時々現れる程度に変化している。

このように、上品蓮台寺本ではインドの宮廷内の建物、旧益田家本では長者の家や釈迦の横、東京芸術大学本では釈迦の傍らに、人間の背丈ほどの太湖石が描かれている。中国の原本の制作者は、中国では宮殿や地方の権力者の家に太湖石が置かれていたことから連想して、宮廷の建物や権力者の家だけでなく、偉大な釈迦を表わすということで、その傍らに太湖石を描いたのではないだろうか。

(3) 『華嚴宗祖師絵伝』

『華嚴宗祖師絵伝』(高山寺蔵)は『華嚴縁起』とも呼ばれている。華嚴宗を中国から伝えた朝鮮新羅国の華嚴宗の2人の祖師、元曉(がんぎょう、617～686)と義湘(ぎしやう、625～702)の行状を描いたもので、「元曉絵」と「義湘絵」から成り立っている。詞書の作者は明恵(みょうえ)上人(1173～1232)といわれているが、絵を描いたのは「元曉絵」が絵仏師の恵日房成忍、「義湘絵」が内裏絵所絵師の兼康と推測されている。

「義湘絵」の巻2だけに、太湖石は描かれている。唐土に着いた義湘が最初に訪れた邸宅の建物の横には、縁石で囲まれた中に巨大な太湖石が置かれ、その背後にツバキが植え込まれている[図9]。同巻で義湘は都長安の至相寺に、中国華嚴宗の第二祖とされる智儼(ちごん、602～668)を訪れているが、ここの講堂らしい建物の横にも、縁石で囲まれた中に大きな太湖石が描かれている。植栽としてはボタンがあることが、先の邸宅の場合とは異なっている。

この絵巻物は、北宋の端拱元年(988)に書かれた『宋高僧伝』が基になっているが、描写されている情景は智儼と義湘の年齢からすると、7世紀中頃を想定している。13世紀前半に制作されたことから、中国から伝来していた南宋あるいはそれ以前の絵画を参考に描いたものと考えられている³³⁾。

(4) 『玄奘三蔵絵』

『玄奘三蔵絵』(大阪・藤田美術館蔵)は『法相宗秘事絵詞(えことば)』とも呼ばれている。中国唐代の高僧玄奘(げんじやう)三蔵(600?～664)がインドに出向いて、貴重な梵字の經典を中国にもたらしたことを題材としたもので、13世紀後半の制作とされている³⁴⁾。

太湖石はさまざまな場面に登場している。巻1第1段の玄奘父陳慧の邸内には、建物に接して掘られた園池の岸に、屋根に届きそうなほどの大きな太湖石が据えられていて、背後には花木が添えられている[図10]。巻2第6段の高昌国王の麴(きく)文泰の宮殿では、太湖石の上部に異様な獅子のような首が描かれ、巻3第6段の梵衍国の寺院では、太湖石の上部が加工されて手水鉢(ちょうずばち)になっている。

さらに巻4第3段のアシュカラ寺の僧坊では、基壇の手前に小ぶりの4個の太湖石が並べて置かれ、バショウやササや草花が添えられている。巻6第2段のナーランダー寺の建物は池が



図10 『玄奘三蔵絵(巻1第1段)』(13世紀後半)

あり、その中の大きな太湖石には獅子・象・水牛の頭が彫られていて、噴水のように水を吐き出している。また、同巻第7段のナーランダー寺の長老の居室前の池中には、獅子のような形をした巨大な太湖石が描かれている。

巻7第3段ではナーランダー寺の建物横の太湖石は、3石がバランスよく配置されているが、同巻第5段で同じ寺の建物を描いた場面では、太湖石は皺を付けたおだやかな描き方に一変している。だが、巻10第4段の洛陽宮の皇帝の御殿内の写経をしている建物の横には、コケのはえた太湖石が仕切りとして置かれ、巻12第6段の西明寺の僧房横には、草花が咲いた人間の背丈ほどの太湖石が描かれている。

太湖石の描き方からすると、巻7第3段までは同一人物の作に見える。しかし、巻7第5段の太湖石は皺がある独自の描法に変わっている。巻10と巻12の太湖石は、空洞の中に筋がいくつも描かれていて、これまでの巻とは異なっている。『玄奘三蔵絵』の絵師としては、『春日権現験記絵』の筆者高階隆兼(たかしなとかかね)が挙げられているが³⁵⁾、太湖石の筆法から見る限り、絵師は少なくとも3人はいたことになる。

(5)『東征伝絵巻』

『東征伝絵巻』(唐招提寺蔵)は中国唐代の高僧鑑真(がんじん、688～763)が、日本からの留学僧の懇請で苦難の末に來日して、戒律宗を伝えて唐招提寺を創建するまでの経緯を描いている。永仁6年(1298)に唐招提寺末寺の鎌倉極楽寺の忍性(にんしょう)が制作を企図し、唐招提寺に施入している。絵巻中には「画工 六郎兵衛入道蓮行」と記載がある³⁶⁾。

太湖石は絵巻の2ヵ所に見られる。巻3第5段には、中国振州太守の邸宅に招かれた鑑真が描かれていて、建物前面には方形の縁石に囲まれた水の中に、太湖石が据えられている[図11]。同巻第7段には、中国韶州(しょうしゅう)の法泉寺の建物での鑑真一行の話し合いが描かれているが、その建物の横の方形の石積み台の上に、柵で囲まれた太湖石が置かれている。

水があるかどうかは別として、四角形の枠の中に人間の背丈ほどの太湖石が置かれていることは類似している。中国から渡来していた絵図に石製の台の上に太湖石が載っている図を見て、



図11 『東征伝絵巻(巻3第5段)』(13世紀後半)

小さな池を想像的に描き加えた可能性も考えられる。

5. 結論

太湖石の持つ形の特異さが観賞するのに値するものだったことから、中国では唐代から愛好され続けてきた。入手が困難だったことも、太湖石の収集をあおり立てたのだろう。日本の古い絵画にも太湖石が描かれているのは、中国を象徴する文物の1つとして、太湖石を考えていたからに他ならないと言える。中国の太湖石を描いた絵画と比較してみても、かなり正確に描かれているので、渡来していた中国の絵画を参考にしたと考えられる。

日本の絵画に描かれている太湖石を、庭園のなかでの置き方によって分類していくと、中国の庭園での太湖石の利用は次のようにたどることができる。

- 1) 中国唐代の「仕女図」(8世紀後半)から、古くから庭園に小ぶりの石を置くことがされていたことがわかるわけだが、それらの石が太湖石に変わっていったことが、日本の『鳥毛立女屏風』(8世紀中頃)からうかがえる。唐代の「七賢図」(9世紀後半)に見られるように、次第に大きな太湖石を庭園に置いて鑑賞するようになっていったのだろう。
- 2) 五代の「八達春遊図」(10世紀)では邸内に巨大な太湖石を1石だけ飾っているが、日本の『絵因果経』(8世紀中頃)から、人の背丈ほどの太湖石を中国では唐代から、庭園の主要な場所に単独に置いていたことが類推できる。特異な形をした太湖石を飾りとしてだけでなく、鑑賞の対象にもしていたのだろう。
- 3) 元代の「龍池競渡図」(14世紀前半)は宮殿の建物の左右に大きな太湖石を置き、明代の「漢宮春曉図」(16世紀)でも宮殿の前や横に縁石に囲まれた太湖石が描かれているが、これらは題材が過去のもので想像の域を出ていない。しかし、日本の『華嚴宗祖師絵伝』(13世紀前半)や『東征伝絵巻』(13世紀後半)から、中国では宋代(960～1279)には建物の前や横に、太湖石を置いていたと推測される。このように建物の周囲に太湖石を置くようになるのは、庭園内の主要な場所に単独で置くよりも後のことではないだろうか。
- 4) 園池に太湖石を使うことは、清代の「乾隆帝及妃古裝像」(18世紀)になって見られることだが、三国時代の魏の華林園(3世紀後半)や北魏の華林園(5世紀後半)の影響からか、唐代の墳墓から出土した「三彩堂屋」(8世紀)では、奥の建物の前に築山を持った園池が作られ、築山の前面に大きな立石

が置かれている。園池に太湖石を置くことは、かなり以前からだったという感じがする。日本の『玄奘三蔵絵』（13世紀後半）では、玄奘の父の邸内の建物に接して掘られた園池の岸に、大きな太湖石が据えられている。中国では園池の岸に太湖石を置くことが、宋代には始まっていたことを『玄奘三蔵絵』は示している。

このように日本の絵画からも、中国での唐代から元代頃までの太湖石の使い方を知ることができる。特に唐代の太湖石についての絵画史料は中国にも少ないので、『鳥毛立女屏風』や『絵因果経』は貴重な事例ということになる。

しかし、日本の古代の庭園で太湖石が使われていたという文献史料は、まだ読んだことがない。また、発掘された飛鳥・奈良・京都の庭園から、太湖石が発見されたということも聞いたことがない。太湖石のことは中国の詩文や絵画から知ってはいたが、グロテスクなために日本人の趣味には合わず、受け入れることができなかったのだろうか。だがもし、太湖石が日本に大量に運ばれていたならば、流行していた可能性もあるように思う。イスラム世界にもイル・ハーン朝時代(1258～1353)に、モンゴル人が太湖石を描いた美術品を持ち込んでいる。しかしその後、太湖石を図案化して植物の模様にしてしまったのは³⁷⁾、やはり実物が入っていなかったためなのだろう。

〔注〕

- 1) 外村中「明末清初以前の中國庭園における太湖石について」（以下「明末清初以前」と略す）『ランドスケープ研究（第59巻第1号）』日本造園学会、1995年、p.24-36
福本雅一『太湖石』芸文書院、2009年、p.1-80
- 2) Agnese Hajjima「雪舟絵画に見られる太湖石のモチーフとその意味」『言葉と文化（9）』2008年、p.53-70
- 3) 外村中「古代東アジアの「池と島の園林」と「池と築山の園林」」『仏教芸術（286）』2006年、p.13-56
- 4) 陳階晋「三彩堂屋」『世界美術大全集4（東洋編第4巻一隋唐一）』小学館、1997年、p.47・357
- 5) 前掲、福本『太湖石』p.18
- 6) 前掲、福本『太湖石』p.3
- 7) 岡村繁注『白氏文集（9）』明治書院、2005年、p.175-177
- 8) 前掲、外村「明末清初以前」p.28・30
前掲、福本『太湖石』p.39-42
- 9) 前掲、福本『太湖石』p.29-31
- 10) 井波律子「太湖石と纏足」『中国の美術』昭和堂、2003年、p.162
- 11) 前掲、福本『太湖石』p.54
- 12) 前掲、福本『太湖石』p.92-117
- 13) 新村出編『広辞苑（第5版）』岩波書店、2006年、p.1598
- 14) 前掲、外村中「明末清初以前」p.28
『中国美術全集 絵画編（2）』北京・新華書店、1984年、p.49
- 15) 日本放送出版協会編・発行『故宮博物院（1）』1997年、p.26・80・81
- 16) 前掲『故宮博物院（1）』p.27・81
- 17) 前掲『故宮博物院（1）』p.58・59・84
- 18) 2012年1月18日付け朝日新聞朝刊の記事
- 19) 前掲『故宮博物院（2）』p.34・82
- 20) 前掲『故宮博物院（3）』p.40・41・82
- 21) 前掲『故宮博物院（4）』p.52・53・83
- 22) 前掲、外村「明末清初以前」p.28
『中国古代書画図目（3）』北京・新華書店、1990年、p.119
- 23) 前掲、外村「明末清初以前」p.28
『中国古代書画図目（1）』北京・新華書店、1986年、p.35

- 24) 前掲『故宮博物院（5）』p.12・78
- 25) 前掲『故宮博物院（5）』p.22・23・79・80
- 26) 前掲『故宮博物院（5）』p.68・69・85
- 27) 前掲『故宮博物院（5）』p.70・85
- 28) 前掲『故宮博物院（15）』p.23
- 29) 正倉院事務所編『正倉院宝物 北倉』朝日新聞社、1987年、No.88-99、p.38-39
- 30) 杜曉帆「仕女図」、前掲『世界美術大全集（4）』p.35・351
- 31) 有賀祥隆「過去現在因果経絵」『角川 絵巻物総覧』角川書店、1995年、p.28-32
- 32) 亀田孜編『絵因果経』角川書店、1977年、p.3-54
- 33) 小松茂美編『華嚴宗祖師絵伝』中央公論社、1990年、p.1・78-93
- 34) 小松茂美編『玄奘三蔵絵（上・中・下）』中央公論社、1981・1982年
- 35) 宮次男「玄奘三蔵絵」、前掲『角川 絵巻物総覧』p.198-202
- 36) 小松茂美「図版解説」『東征伝絵巻』中央公論社、1988年、p.1
- 37) ヤマンラール水野美奈子「太湖石からサズ葉文様への系譜」『オリエン特（43-1）』2000年、p.71-88

〔付記〕

図の転載については、出版社から所有者の承諾を取るようと言われ、所有者に連絡をとり承諾をもらった。非売品の論文ということで、国内の博物館・寺院・官庁は無料だったが、北京と台湾の故宮博物院は有料で、1点につき北京は40ドル、台湾は50ドルを請求された。

最初は中国語で依頼書を書き航空便で送ったが、2回目からは煩雑だったので英文のメールでのやり取りになった。料金に関することはわかりにくいので、英文の作成については本学事務局の中村時宗氏にお世話になった。一人だったら面倒になって、途中で断念していたと思う。

相手の口座に送金するのには、日本と中国の両方の銀行の手数料が必要になる。日本の銀行はそれぞれ違っていて、最低が2,500円で最高が7,000円、中国・台湾側の銀行は100ドルを超えると10ドルかかることがわかった。小額の送金の場合は、手数料の方が高くなりかねない。為替(かわせ)の方が安い、いつ着くかわからないし、相手に届かない恐れもある。

台湾の故宮博物院は5回メールを送ったあとに送金して承諾をもらえたが、北京の故宮博物院は契約書を取り交わす必要があり、手続きが煩雑でなかなか許可が取れなかった。承諾をもらうまで10回ほどのやり取りをして、論文を書く以上の労力を費やすことになった。

非売品の学術論文については、図の転載は無料という国際協定を結べないものだろうか。